

ふるさと見て歩き 第97回

「北富田小に来たマッカーサー!？」

◇資料館に届いた問い合わせのメール

今年4月、資料館にこんなメールが届きました。

「母(79歳)が旧山方町(当時は諸富野村)の北富田小学校に通っていた頃、マッカーサー元帥が小学校に来たと言うのですが本当ですか?大きなパイプをくわえ、背が高かったそうです。」

当時の北富田小学校で何があったのでしょうか?地元にお住まいの堀江文雄さんにお尋ねしました。



▲北富田小学校跡地

◇進駐軍の小学校訪問

堀江さんによると、北富田小学校にやって来たのは、GHQ茨城軍政司令官リンボー少佐でした。もちろんマッカーサー元帥ではありません。堀江さんが大子の農林学校を卒業し、北富田小学校で代用教員となった数カ月後、終戦翌年のことだったそうです。

少佐は近くまで通訳らとともにジープで来て、長く狭い坂を上り、息を切らして校門に着くと、深呼吸して息を整えてから、通訳を従え長靴を鳴らして職員室に入りました。勲章のついたカーキ色の軍服に帽子をかぶり、葉巻をくわえていたそうです。初めてアメリカの軍人を見た小さな子どもたちが、不鮮明な新聞の写真で見たマッカーサー元帥と、少佐の姿を重ねてしまったのは無理ありません。

彼らの来校については、3日ほど前に連絡があって分かっていたようですが、先生方はさぞや緊張したことでしょう。

農林学校の徽章のついた堀江さんの帽子を、兵士のものと思った少佐に、片言の英語で学帽であることを説明したことから会話がほぐれ、中を確認するため机の引出しを開けてほしいとか、学校に軍人勸諭等が保管されていないかなどを質問して、保管されている図書や資料の焼却を指示し、3つの教室を回って、10分ほどで学校を後にしたそうです。その態度は威圧的なものではなく、紳士的でさえあったといいます。

◇失われた地域の教育資料

本当にリンボー司令官は、県北の不便な小学校に自ら出向いたのでしょうか?

「町場の学校よりも、僻地の小さな学校にこそ軍国主義的な資料が残されやすいし、また物見遊山的な気分もあったのではないか」というのが堀江さんの見方です。

その後すぐに、北富田小学校に保管されていた図書や貴重な教育資料、児童が作ってきた明治時代からの壁新聞をとじたものまで、日清・日露戦争のことが書かれた部分があったために、すべて焼却処分されました。その中には、堀江さんのお母さんが書いた壁新聞もあり、残したいと校長に希望しましたが許されなかったそうです。厚い本は燃えにくく、すべてを灰にするのに三日三晩かかったとのことでした。

茨城県は、水戸学を中心とした国家主義的思想が根強いとして、鹿児島県とならぶ軍国主義、国粹主義の地域とみなされ、GHQから戦前・戦中の教育資料の払拭を厳しく指令されました。進駐軍兵士が直接学校を訪問し指導したのも、その表れです。

県内の教育関係者は、進駐軍の監視を恐れるあまり、選別することなく資料を焼却したため、県内には教育資料が残らず、教育史のみならず地方文化を知るうえで大きな損失となりました。

◇それぞれの学校にそれぞれの歴史

去る10月19日、市文化センターで、市民の企画・運営による「ウダーベ音楽祭」が行われ、市民約800人が参加し、統廃合になった学校を含む市内38小学校の校歌が熱唱されました。

学校には学校の数だけ、それぞれの歴史や人々の思いがあります。今回、北富田小学校はウダーベ音楽祭に不参加でしたが、他にも明治時代からの歴史をたどれば、統廃合になった小学校や分教場は数多くあります。それらの学校の歴史や記憶が失われる前に、記録にとどめる必要がある、と強く感じた問い合わせでした。



少佐も登った
北富田小への道▶
(小学校は山の上)

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450